



たこじそう

みなみまち

# 蛸地蔵のはなし (南町)

たこじそうそんりやくえんぎ

一 蛸地蔵尊略縁起より一

私が、住んでいる南町には「蛸」にまつわる不思議な  
 言い伝えがあります。漁師さんの網に「イイタコ」(頭に  
 5円玉くらいの金の環がある)が入っていたら海に逃が  
 してやるんやとか、蛸地蔵さんに、願掛けしたら、その  
 年の1年間は、蛸断ち(タコを食べない)をすると、願  
 いがない、ご利益があるんやとか。

こんな不思議なことがごく最近まで、言い伝えられ、  
 まだ信じている人もたくさんいたんです。

茅渟の海を懐に抱く岸の浦にまつわるお話です。こ  
 の地蔵を祀っているお寺は、護持山朝光院天性寺と言  
 います。お祀りしている仏様は、二尊で、一つは「阿弥陀  
 如来」さん、もう一つは「蛸地蔵」さんと言われ、地域  
 の皆さんに親しまれ、あがめられている秘仏の地蔵菩薩  
 さんです。

昔からこの郷に永くおら

れる地蔵さんで、言いつた  
 えに岸和田の地主神と言わ  
 れてきました。蛸地蔵さん  
 が安置されているお堂は、  
 他に類がないほど立派なも  
 のです。また、この地蔵さ  
 んは誰が造ったのかは、わ  
 かっていませんが。

むかし、むかし、この地蔵さんが、岸の和田の城内  
 にあって、立派なお堂に安置されていた時です。

敵の軍がこの地にやってきて、お城に乱入して陣屋  
 を構えて、いろいろ乱暴をしたんです。お城にあった  
 立派な物やお堂の金銅の仏具を壊して、武器にしたん



です。ついでに、地蔵さんも壊してしまえと、斧を振って打ち壊そうとしましたが、もともと木でできた木像やのに、鉄でできたように何もできなかつたんです。そこで腹を立てて、軍の兵がこのお地蔵さんを海底深く沈めてしまつたんです。

それから、時が流れて、幾年月がたつたんですけど、こんなむごい出来事を誰もが忘れて、地蔵さんのこともすっかり忘れられてしまつたんです。

建武年中（1334〜1336）の頃のことです。  
茅渟の海（今の大阪湾）が、大嵐にあり、浦方や町方の人々が住んでいるところまで高波が押し寄せ、今にもすべてのものが波にのみこまれてしまつてしまつてもうだめだと覚悟を決めた時、誰かが、「そつや。お城まで逃げよう。」と、言いました。

そして、皆が城に向かって逃げはじめましたが、高波はもうすぐそこに迫ってきています。誰もがもうだめだと思ったその時です。海中より、大きな蛸に乗った地蔵さんが波に浮かびながらお城の隙まで、やってきたんです。

するといままであんなに荒れ狂っていた風、波がピタッと止み、家や船、田んぼまで、何事もなかつたように、そこにあつたんです。

「なんでや。不思議やな。わしら。助かつたんや。」  
人びとは、この不思議な出来事は、蛸に乗ったお地蔵さんのおかげや思ひ、手を合わせ、信仰を厚くしました。



それで、今度のことと助けられた浦方、町方、村方  
すべての人がこれを機会にそれぞれの生業（仕事）に  
精を出して、門前市がもんぜんいちでき、お城のこのお地蔵さん  
にお参りする人々が増えてきて、元氣を取り戻したんで  
す。

この様子を見た、お殿さんも不思議な縁を感じて、  
お城の一角に、新たに立派なお堂をたて、このお地蔵  
さんをお祀りしたんです。

それから時が流れましたが、世の中の戦は国のあち  
こちで止むことなく続いてたんです。お殿さんは、家  
来と相談して、

「この戦いで、あの地蔵さん昔のように海へほうりな  
げられたり、兵火にあって焼失したら、あかん。こ  
の戦いがおさまるまで、地蔵さんをお守りするため  
に、お堀に埋め、隠すことにする。」

と言われ、大事に大事にお堀の中に入れたんです。そ

れからも、まだまだ、戦いがつづき、再びお地蔵さん  
さんを堀から揚げて、お祀りすることはなかったんで  
す。そのまま泥にまみれたまま堀に深く、うずめたま  
まにしてたんです。そして、みんな地蔵さんのことな  
ど忘れてしまったんです。

年移り、またしても戦乱の世が続いて、天正年間（1  
573〜1592）になりました。このころ紀州根来・  
雑賀の軍が、またお城に押  
し寄せ、戦いがはじまった  
んです。

根来・雑賀は何万と軍を  
組み、お城を取り囲む。お  
城のほうも、入らせないよ  
うによく守り、防いで戦う  
たんですが、なんせ敵の勢  
いが物凄く、矢音、雄叫び



の中、敵味方が相まみえ、乱れ、鬨って、城の内、外も総くずれでもう駄目だというそのとき。

今度もまた、どこからともなく、ひとりの法師が蛸に乗って突然現れ、幾万の敵の中へ真っ先に馳せ入り錫杖を一振りするや、敵の兵十人程をなぎ倒す。天が稲光りし、地が割れんばかりの勢いです。

敵軍は一時、これに驚き尻込みするようでしたが次第に力を盛り返し、

「このくそ坊主、なにすんや。根来の威力ここに見せん。」

「たかが一匹の蛸の法師、打ち取れ、打ち取れ。逃がすな。逃がすな。」

と、口々にわめいて蛸の法師を多勢で囲み、今にも打ち取らんとしました。

その時、茅渟の海、俄に雷がなり、海底が割れんばかりに鳴動して、いっせいに海辺が大きな音を出して

大波が打ち寄せてきたんです。そして、その波に乗って

数千の大蛸、小

蛸が群れをなして現れ、口から墨を

出し、敵軍に吐きかけたんです。忽ちにあたり一面闇

夜のごとく真っ暗闇になってしもう

たんです。敵軍は

蛸の噴き出す毒気・墨に咽てしもう

て、もんどり打って馬から落ちたり、



ひっくり返ったり、そこから辺へ倒れるものが仰山おんざんで、ついに負けて逃げ帰ったんです。戦は城の勝ち。  
お殿さん、戦が終わってみんなに褒美ほうびをやりたいた  
思っただんです。

「この戦に勝利できたのは、あの蛸の法師さんのお蔭かげや。まずは、一番の働きをしたあの蛸の法師に褒美ほうびやらなあかん。どっかに居るんや。」

と、家来たちに尋ねたが、誰もあの法師さんの行方知ゆくえるものはありません。

お殿さんは、このご恩に何とかお礼申し上げたいと、心から願っていたが、戦の疲れでそのまま寝てしもうたんです。その夜、不思議にも殿さんの夢枕にあの蛸の法師さんがでてきて、

「あなたは、知らんと思うが、私はその昔、この岸の郷まちを護るために海中から現れたもんや。いつもこの土地を護りたいと思ってきた。今も、その思いに変

わりはない。そやさかい今回も出てきたんや。殺し合いはいやなんや。そこで、私の身内一族の蛸を使つて、大軍をやっつけて、あなたに勝たせただけや。」  
そう言つと、すうと、消えてしもうたんです。

お殿さん、夢からさめて、夜の明けてないのに、家来を呼び集めて、みんなに、自分が見た夢の話をして、聞かせたのです。

その話を聞いて、家来たちは、心の底から、蛸の法師を敬やぶやうい、ありがたいといふ気持ちになったのです。それから幾日いくさつもせんうちに、夜になると、堀の中からなんか光るものが見



えると言つて、見た人が怪しんで、噂うわさになったのです。お殿さんの耳にもはいつて人夫じんぷを使って堀の中を探たぐらせたんです。泥の中にけつたいなもんがあって、何がやらわからんもんやさかい、堀から揚げてみたんです。それで、そのものに水をかけたり、さらさらで洗い流したりしてよく見たんです。

それは、頭の丸いお坊さんや。丈三尺たけさんぽう（約90cm）ほどの片膝かたひざを曲げて、片足を伸ばし、左の手に宝珠ほうしゆを握にぎり、右の手には六鑲むくわうの錫杖しやくじやうを持っておられるお地藏さんです。かのお殿さん、涙をながして歎なげび、家来いひかともどもその場にひれ伏して、拜まがんだそうです。

「これは、この岸の郷の繁栄はんえいの兆きざししや。めでたい縁ゆかりにおうた。ありがたや。ありがたや。このお地藏さんがこのお城おしろに在あるかぎり。万民ばんみん皆みな共ども、これからは、泰平たいへい間違あやいなしや。」  
と、言いつたんです。

このお城おしろの内に、立派な別殿べつてんを造つくって、お地藏さんを安置あんじしたんです。それから、ひと七日の間、城門じやうもんをあけて、城下じやうげの人びとにお詣まじりを許ゆるしたんです。お詣りした人たちや、近くまで来て頭かぶをさげお願いをした人たちは、いろいろとご利益りやくをいただいたそうです。

文禄年間ぶんろくねんかん（1593～1596）になって、このお殿さんが国替くにかえのとき、

「お地藏さんのお陰かげで、いろいろ、ありがたいことばっかりやった。」



「このお地蔵さんも、一緒にお連れして行きたいんや。どうしたもんかいな。」

と、家来たちに相談してたんです。そうしたら、ある晩、お地蔵さんが、お殿さんの夢枕に現れて、

「私を連れて行きたいそうやけど。私はこの地いんねんにこそ因縁いんねんがある。ここを離れる気はない。強いて、それでも、連れて行きたいと言っならば、この錫杖を与えるよって、これを私と思っって、持って行きなはれ。」

お殿さん、ハッと、夢から目がさめて、あたりを見渡すと、枕元に、六ろっかん鑲の錫杖がある。その殿さんは、有難ありがたがっって、よその国に行っっても、その錫杖をお家の宝物として、大事に大事にしてたそうなんです。

それからまた何年かして。小出播磨守がお殿さんのとき（1585〜1604）のことです。白法師の姿をしたお坊さんが、お城の周りに、あちこちに出て、



城の周りを行き来する人たちが、気味悪がっっているという噂が、お殿さんの耳に聞こえてきたんです。そこで、家来たちを集めて、どういっうことか、いろいろ評議ひやうぎしたけど、誰ひとりとして、この地蔵さんのこと知らんかったんです。あの白法師が、何回もこのお城を救ってくれた地蔵さんやて誰も考えっかなかったが、お殿さんは、さすがです。今までのお城の様子から、次のように考えたんです。

「この白法師の出現こそ、この城を何回も苦難くなんから救

ってくれたあの地蔵菩薩（じざうぼさつ）の身代わりやないか。前世からの因縁で、もうそろそろ、お城をお守りするだけではなく、道行く人びとにも、拝みやすくしてもらいたいという大きな慈悲（じひ）の方便（ほうべん）（手段）と考えられへんか。そんなら、このお城の内じゃのうて、外に安置（あんちやう）奉らなあかん。どうしたもんかいな。」

と、思案（しあん）してたときです。このお殿さんの言葉を伝え聞いて、その時の天性寺の住職（じゆうしやく）、徳誉上人（とくよ）が、うちの寺でお祀りしたいと申し出たんです。

「私は、この地蔵さんを心から、信仰しているものでござります。ぜひ私どものお寺へお迎え申したい。」

地蔵さんのこころに添うやうに安置奉ります。「と、この地蔵さんをお迎えするのじつになったんです。

早速（はや）、お願いしてお迎えしたのはいいんやけど、今まで何回も岸の浦や岸の城などをお守りして闘（たたか）って

きたもんで木像のお身体は傷だらけ。槍（や）や銃弾（じゆうだん）の傷で痛々しかったです。このままでは、お迎えして安置奉るなんてできません。そこで、

「京の都にこの地蔵さんをお連れして仏師に修復をお願いしようか。」

と、思って、その用意で忙しゅうしてたんです。不思議なことに、その夜に、あのお地蔵さんが、長谷川勘左衛門（かんと）という土（つち）の夢（ゆめ）に立たれて、

「天性寺の上人が、この私を修復するために、京へ連れて行くとうとしている。それはうれしいが、私は、

この郷を離れることはできません。この地がなんかあったらあかんのや。岸の里へ仏師を呼んで、ここで修復してもらいたい。と伝えてください。」

と。勘左衛門はこのお告げを聞いて、びっくりに、地蔵さんのことは良く知らんけど、夜が明けのを待って、急いで天性寺へ駆け込み、上人さんにいきさつを

知らせました。

実はその晩、天性寺の上人も同じ夢を見ており、ふたりとも会ったことがないのに、このお告げの内容が怪しく一致してびっくりました。そして、京へ、地蔵さんを持って行くのをとりやめて、京から、仏師に来てもらい、ご本尊の修復をお願いしたんです。

その時、修復のためにご本尊のお身体をしっかりと調べたんです。びっくりするなかれ。鉄砲の弾が、いくつと知れんくらいくいこまれていた



んです。

それで、その昔、蛸を引き連れて、岸の郷やお城を護るために戦ったという言い伝えは、ただの噂話ではなかったことがはっきり分かったんです。

仏師は、有難さのあまり、修理の手を止めて拝みました。

「すべての弾丸の痕をきれいに仕上げるのは、簡単なことやが、後々の人びとのために噂や作り話やと言われんようにしとかないかん。」

と、思い、

「一か所だけ、鉄砲の弾丸の痕をそのままに残して修理します。」

と、仏師が徳誉上人にお願いしたんやそうです。こんな訳で、天性寺にこの修復された地蔵さんが、それからずっと安置されているのです。



「今でも、その弾丸の痕が残っているのかな。見てみ

たいな。」

こんなこと考えたらあかん、あかん。もったいない。もったいない。

それから後、地域のみなさんに親しまれ、蛸地蔵さんと言われるようになったんです。

それから何百年も経ってるけど、この蛸地蔵さんのこと、みんな忘れんこと、大事にお祀りしてること、ここに書いておきます。

南町のだんじりの彫物ほりものに、蛸に乗ったお地蔵さんが彫られてます。どの部分にあるか、祭りの時、しっかり探してみてください。大屋根、小屋根に乗っている人の法被はっぴにも蛸がおるんです。絵馬堂えまどうには、いろいろな願いが描かれてる絵馬が掛かってます。地蔵盆じぞうぼんには、念仏講ねんぶつこう言うて、数珠繰りじゆずくしてます。

8月23日、24日の縁日。両側の表参道に屋台が出ています。などなど。